

きよんきよんのピアノ日記

きょんきょんのピアノ日記

ポケット文春 567

著者略歴

昭和5年大阪に生る。同28年大阪外国語大学
仏語学科卒業後、サンケイ新聞大阪本社入社。
同社社会部、文化部を経て、東京本社教養部
にうつり、育児担当記者として活躍。40年9
月退社し、評論家となる。一男一女の母。
著書：「ママ、日曜でありがとう」「パパこっ
ちを向いて」 現住所：東京都新宿区柏木
3-351 高澤ビル 52号

1967年2月20日 第1刷発行

定価 270円

著者 ^{たわら}俵 ^{もえ}萌 ^こ子 ©

発行者 上 林 吾 郎

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3

印刷 図書印刷
製本 矢嶋製本

Printed in Japan

万一落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

夫とつきあう法 秋山ちえ子

夫婦の生活はちょっとした心遣いでうまくいくうでもあり、相当の忍耐を要するもののようでもある。誰かに身上相談したくなった時に最適の本

230円

きこなし読本 マダム・マサコ

本当のベスト・ドレッサーの資格は何か？ 各人の個性にマッチした本当のおしゃれの数々を斯界の権威が開陳する。服飾に関心のある人の必読書

220円

2DK夫人 塩田丸男

いまや三百万にふくれあがった団地族は、社会の中で特異な存在となり、様々の新しい風俗や氣質を生み出した。団地マダムの合理的生活を描く！

220円

受験期 波多野勤彦

相も変らぬ進学難だが、この苦難の道を人生の途上で効果的に生かすにはどうすればいいか。母と子のふれ合いを、日記と手記とで綴る必読の記録

240円

タカシよ 手をつなごう 荒井良

サリドマイド児を持った親の迷い、悲しみ、おそれ、そしてそれらを克服して、人間らしく生きる希望をとり戻すまでの、淡々とした、感動的記録

220円

まあちゃん・こんにちは 山本祐義

まあちゃん・こんにちは——これは米国のケント校に留学した著者が故国のお母さんに宛てた真率な手紙の書き出しです。ベスト・セラーの新装版

250円

あしたの母に 愛を捧げて リョビン恵美子

日本留学のカナダ青年と婚約した女子学生が未来の姑——苦難を越えて来た亡命ロシア人——と交した、信頼と理解にみちた感動の往復書簡集！

240円

よ
ん
き
よ
ん
の
ピ
ア
ノ
日
記

俵

萌
子

文
藝
春
秋

目次

1. 満四歳のプレゼント

人間らしくやりたいな	8
才能が、あるかしら	18
むかし髪ゆい、いまピアノ	21
何歳何か月からはじめるか	36
オルガンかピアノか	41

2. 先生、コンニチワ

初レッスンの恐怖	48
集団レッスンか、個人レッスンか	55
当たるも先生、当たらぬも先生	59
ママの手習いは必要か	67

3. ピアノ、捨ててよ

4.

わが家のピアノ作戦

"1"ってどういうこと？	74
多忙家庭のおけいこ騒動	81
ぶん殴りか、ニコポンか	86
"つめこみ一方"のおけいこ	93
幼児のための方法論を！	100
ママ、がんばろう	112
うたが、ひけた！	118
ひとりで練習できるか	125
おけいこのタイミング	131
音痴ママの効用	138
亭主操縦法に似た原理	144
パパの作戦	152

5. バイエルさん、さようなら

学会会というエポック……………160

この曲、かなしいみたい……………168

バイエル七十番のカベ……………177

はじめての発表会……………182

6. わたし、ピアノ、好きだもん

男の子のピアノ……………192

おけいこの副産物……………201

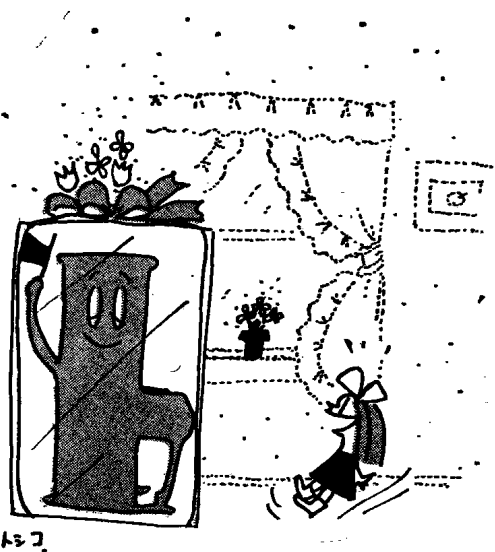
学業とおけいこ……………209

ママの陥る、危険なワナ……………224

あとがき……………233

1

満四歳のプレゼント



人間らしくやりたいな

団地の、テラス・ハウスに、ピアノがやってきた。
娘の協子が、満四歳になった日の朝である。

いったい、どうやって入れるのか。

もっとも、置く場所は、十日も前から決めてある。二階の、わたくしたち親子四人の寝室、六畳。いままでベビーベッドが置いてあった。ピアノを入れるためには、ベッドを片付けなければならぬ。片付けるといっても、しもうところがない。一週間前、団地のマタニティ夫人を歴訪して、ひきとり手を決めてきた。四年間、お世話になりつづけ、二代にわたってわが家の赤ん坊を収納してきたベッドも、ピアノとひきかえにおさらばである。

運送屋さんは、忍者のようにひらりと、二階の窓わくにとまった。スパナをとり出す。頑丈な鉄製の手すりが、スポンとはずれたから、あきれた。猫の額みたいなテラス・ハウスの庭から丸太棒を二本、二階の窓にわたす。ピアノに綱をかける。上から何人かでひっぱる。すると、黒い巨体は、手もなく丸太棒を伝わって二階めざして上がっていくではないか。モチはモチ屋である。それにしても、二百五十キロの巨体は、あっけないほど無抵抗であった。

公団アパートというのは、どうも人間の寝るべきスペースを、満足に保障してはいないように、わたくしは思っている。それなのに、どの団地も、ピアノだけははいるように設計されているんだそうである。こういうのを、日本的文化性というんだろう。例のおなじみの、タテヨコ長屋、つまり五階建ては、階段いっぱいだが、無事、ピアノさまがお通りになれる。わたくしどもの住んでいるハーモニカ長屋でも、ごらんの通りだ。

消えたベビーベッドのかわりに、姿をあらわした黒い巨漢は、いかにも、窮屈そうであった。にわかに部屋が狭くなる。

かぶせてあったハトロ紙をむく。

黒いピカピカのピアノが、いまわたくしたち夫婦の前に、全容を見せる。堂々としていた。あたりを払っていた。

「とうとう、きたわね。パパ」

わたくしの声は少々うわずり、かすれていたように思う。

娘が四つになったら、ピアノを買ってやりたい、と思っていた。

ながい共稼ぎをした。四歳に間に合わせるには、共稼ぎをしないと無理であった。おかげで、いくばくかの貯金ができた。それを、ポンとはたいた。生まれてはじめての、高価な買い物である。

同じ四つなら、誕生日に間に合わせたい。

(協子ちゃん。おめでとう。満四歳のお誕生日。これは、パパとママからの贈り物です。ながいあいだ、共稼ぎに協力してくれて、ありがとう)

荷物のように、あっちへ預け、こっちへ預けしながら育ててきた娘に、そういつてやれる場面を想像するのは、悪くない。どんなにか、いい気分であろう。わたくしは、運送屋さんに、なにがなんでも九月五日、午前九時に届けてもらいたいと、コワ談判したのだった。

「オイ。きょんきょんはどこへいった」

「きょんきょん」とは、わたくしたち夫婦の、娘の愛称である。

「狭い家で、ウロチヨロされては危ないから、遊び場に待避させてあります」

「呼んでこいよ」

「ちょっと待って」

鼻歌を歌いながら、わたくしは階下へ降りていった。食器戸棚の上には、ゆうべ会社の帰りに買ってきたバースデイ・ケーキがかくしてある。ケーキを、ピアノの上に飾る。ローソクを四本、ケーキに立てて、火をともし。

「きょんきょん」

遊び場に向かつて、パパが呼んだ。

協子が上がってきた。

パパとママは、協子を見つめる。どんな反応を示すだろう。なんていって、よろこんでくれるだろうか。

娘は、部屋の隅に立ったまま、じっとしていた。ピアノとわたくしたちの顔を見比べる。照れたような顔つきだ。何にもいわない。

「どうしたの。これよ、ピアノよ」

わたくしがいった。

それでも娘は、じっとしている。近寄って、触ろうともしない。あんまり立派で、圧倒されたとでもいうのだろうか。ちと、この贈り物、カサが大きすぎたか、とわたくしが思ったとき

だ。娘は、つぶやくように

「コンヤカラ、ワタシタチ、ドコデ寝ルノ？ ピアノノウエ？」
といった。

娘とピアノの、初対面の日である。

わたくしたちに、はじめての子が生まれたとき、その子が女の子と知って、ママは、ちょっぴりがっかりした。なんとなく、男の子であってもらいたいと、内心願っていたのかもしれない。

パパは、ちがった。

「いいぞ。女の子は、いい。心おきなくピアノをひかせられる」

ひとり決めに、彼はつぶやいた。

彼がピアノをたしなむ「優雅な男」だなどと早合点してもらっては困る。彼の器楽的実力は、せいぜい右手の一本指で、鉄腕アトムをさぐり弾きするくらいであって、ピアノのピの字も素養がない。声学的実力のほうは、ときどきドイツ語のリードを、寒くなるような声でがなる。風呂場で「いつかある日、山で死んだら」とか「若者よ、からだをきたえておけ」など、歌声的なものを、突然わめきだすときもある。いずれにしても、そう快適な声ではない。

だが、聞くことは、“狂”の字をつけたい。好きである。結婚したとき、驚いた。夜になると、話ができない。

「あなた、コーヒーのむ？」

「……」

「エッ」

「……」

なんべん聞いても、聞こえない。

二DKをゆるがすような音で、レコードが鳴っている。ツンボの夫婦のように、耳のはたへいって、怒鳴りあわねばならない。毎晩、これが三、四時間つづく。しかも、その間中、テキは踊っている。わたくしには、踊っているとしか見えない。だが、本人は指揮をしているという。虚空を睨んで踊っているときもある。スコアを出し、箸をもって踊っているときもある。

昔から、わたくしは人前でゴルフの格好をする人間と、コンダクターの格好をする人間が苦手であった。いや、もつといえ、新劇と音楽会族というのが、どうも肌にあわない。音楽が好きらしいということは知っていたが、まさか、わたくしのもつとも苦手な“踊り癖”があるとは知らなかった。結婚して、ソレがわかったとき、ただちにわたくしは申し入れた。

「やめてよ。それだけは。寒気がする」

「なんでだ」

「キザよ。いやらしい」

「キザなことあるもんか。オレは、指揮者になりたかった。最高にカッコいい商売だぞ」

どうやら、彼にとって、コンダクターは、男の子がダンスの運転手にあこがれる時期からの、アコガレの職業であつたらしい。それほどあこがれているなら、ガマンしてやるべきだろう。運動にもなることだ。さいきん、指揮棒つきレコードが売り出されているそうだ。踊り族は、意外に多いとみえる。

年のせいだ、このごろはあんまり踊らなくなった。が、レコードマニアは、日に日に重症化するばかりである。それも、ステレオでなく、モノである。モノであることには、ひと理屈あるらしい。わたくしには一向わからない。たぶん、そのほうがジブイのほうはあるまいか。日本レコード蒐集家クラブの会員だ。毎週土曜日、似たような仲間が、マンションに集まっているらしい。その日はかならず午前さまであるところを見ると、よほど楽しい会合とみえる。

もっとも、終戦までの生いたちは、かなりプチブル的であつたらしく、彼の母親という人も、ピアノをひく。二人の妹もピアノをひく。そこで彼は、七歳からレコードをいじくる——という環境であつた。

女の子が生まれたとき、*“心おきなくピアノがひかせられる”*とつぶやいた心情は、音楽好